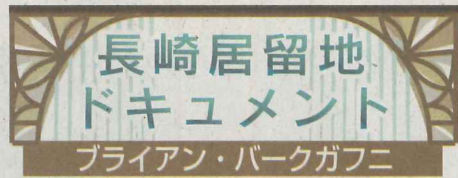


実業家、芸術家に愛される



■19■

オーストリア人ヨハン・クレビッチは、安政開港直後の長崎に来航し、慶応元(1865)年、下り松(現・松が枝町)42番地で「サ

ンクトペテルブルク・ホテル」を開設した。弁天橋のほとりに位置し、船員や旅人たちが上陸する波止場に近いうち立地条件の良い場所だった。
ヨハンは同じオーストリア出身の女性マリと結婚。妻と共にホテルおよび1階にある西洋式居酒屋を営んだ。「ユニバーサル・サルーン」と呼ばれたその居酒屋は、長崎で最長のバーカウンターで有名だった。

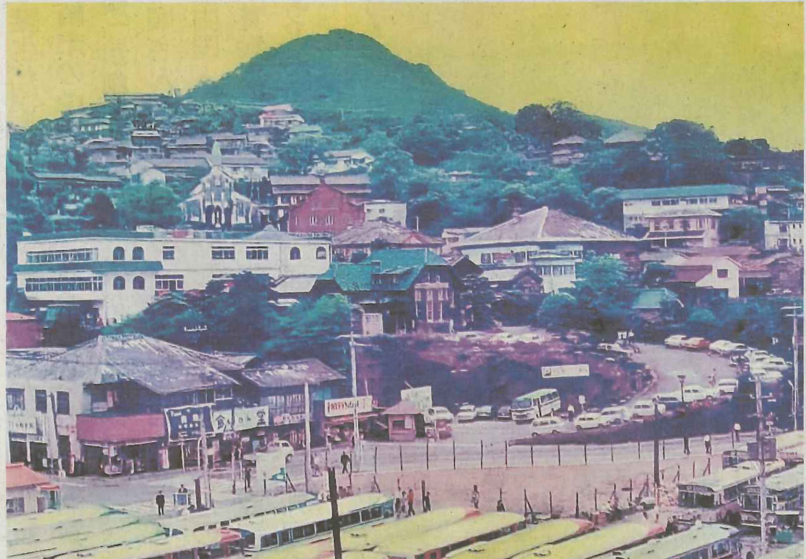


弁天橋越しに見るゴールデン・イーグル・ホテル。ベル・ビュ・ホテルの入り口とロシア語の看板が奥に見える。大正期の絵葉書(筆者蔵)

太平洋戦争まで営業続ける



長崎市松ヶ枝町四十二番地
ゴールデン・イーグル・ホテルの名刺。「最高品質のワインと酒。部屋は月単位または1日単位で格安。食事はいつでも可能。温水風呂とシャワー完備」と書かれている(筆者蔵)



昭和30年代に撮影された南山手かいわい。解体前の旧ゴールデン・イーグル・ホテルの建物が左下に見える。手前のバスは、南山手が観光地として生まれ変わったことを物語っている(筆者蔵)

なり、坂本国際墓地に埋葬された。その後、日本人の実業家、伊野保太郎(ジョージ・イノ)が経営を引き継ぎ、ホテルと居酒屋を「ゴールデン・イーグル・ホテ

ル」と改名した。大正期から昭和初期にかけて、フランス・ホテルやベル・ビュ・ホテルなど、旧長崎居留地の多くの老舗ホテルが外国人人口の減少と長崎の国際貿易港としての衰退に伴って廃業したが、ゴールデン・イーグル・ホテルは太平洋戦争中に休業を余儀なくされるまで営業を続けた。

このホテルに宿泊した最後の外国人の中に、昭和17(1942)年10月、上海に向かう途中で長崎に立ち寄ったフォルマーとアルシディー・ビュアフェルト夫妻、そして2人の幼い息子たちがいた。

デンマーク人のフォルマーは、開戦後も日本に残り、大北電信会社の資産を日本当局に譲渡する手続きを担当していた。アルシディー

はイギリスの豪商、故フレデリック・リンガーの孫娘だった。ホテルに泊まった後、一家は日華連絡船の上海丸に乗り込み、日本を後にした。

ゴールデン・イーグル・ホテルに出入りした日本人常連客の一人は、長崎の異国情緒と歴史的街並みをこよなく愛した版画家、田川憲である。昭和31(1956)年に発行された雑誌「民芸(46号)」の手記の中で、田川氏は次のように振り返る。

「昭和11年頃であつたか、新制作派の中西利雄氏が写生に來た所、大浦のゴールデン・イーグル・ホテルと云ふのに案内したことがある。彼はこの小さなホテルがすっかり気に入り、フランスの田舎のホテルのようだと喜んでゐた。英語の金文字を入れたドアを開けて中に入ると、ロビー兼食堂の広間の奥にスタンドがあつて、頼むとうまい珈琲を飲ませてくれた。(中略)ロビーから二階に上る螺旋形の階段の下に、古色蒼然たる――それでもスタインウエイのピアノが一台置いてあつた。」

戦後に撮影された写真には、弁天橋のほとりにたたずむ旧ゴールデン・イーグル・ホテルは確認できる。しかし、由緒ある建物はやがて取り壊され、新しい近代的なビルに建て替えられた。(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します

絵、史料でたどる「桜田門外の変」

東京・日比谷図書文化館

東京都千代田区の日比谷公園にある区立日比谷図書文化館で「実録 桜田門外の変」展が24日まで開催されている。

安政の大獄を主導した江戸幕府の大老井伊直弼が、水戸藩を脱藩した浪士たちに暗殺された桜田門外の変。幕府を揺るがせたこの事件が同時代人々々どのようなに記録され、伝えられたのかを絵画や史料からたどる。

襲撃者や目撃者が残した史料の他、襲撃の状況が克明に描かれた「桜田門外の変図」(茨城県立図書館)や、月岡芳年が事件を描いた浮世絵などを展示する。観覧料は一般500円、大学・高校生300円など。



月岡芳年の浮世絵「千代田区教育委員会寄託」